

CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.142 April, 2019

目次

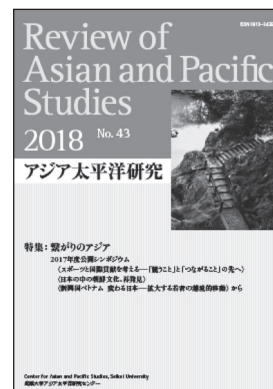
〈アジア太平洋研究センター (CAPS) 研究紀要 『アジア太平洋研究』 No.43 刊行〉	1
〈CAPS主催企画の報告〉	
ドキュメンタリー連続上映会 —グローバルに連鎖する労働とアジアシリーズ— 『ザ・トゥルー・コスト ファストファッション 真の代償』、『危路工団』 —橋大学大学院社会学研究科修士課程 石井 このみ ...2	
公開シンポジウム「人口減少時代と外国人労働者 —日本の産業・労働政策と社会的公正の未来を考える」 —橋大学大学院社会学研究科修士課程 赤瀬 歩 ...3	
〈CAPS叢書 新刊3冊の紹介〉	5

〈CAPSからのお知らせ〉	
2019年度 [CAPS CINEMA] グローバリゼーションの なかの地域共生 (5/25『幸せの経済学』上映 & 講演会) ...6	
〈シリーズ 本を読む〉	
Michio Ito's Reminiscences of Ezra Pound, W. B. Yeats and Other Matters: A Translation and Critical Edition of a Seminal Document in Modernist Aesthetics 文学部教授 Barnaby Ralph ...7	
〈2019年度 研究プロジェクト一覧〉	8
〈2018年度 新着文献 一覧〉	8
〈CAPS活動報告〉	9

アジア太平洋研究センター (CAPS) 研究紀要『アジア太平洋研究』 No.43 刊行

アジア太平洋研究センター (CAPS) の研究紀要『アジア太平洋研究 Review of Asian and Pacific Studies』最新号 (No.43) が刊行されました。

特集「繋がりのアジア」では、2017年度に開催された三つの公開シンポジウム、「スポーツと国際貢献を考える—「競うこと」と「つながること」の先へ—」、「日本の中の朝鮮文化、再発見」、「新興国ベトナム 変わる日本—拡大する若者の越境的移動—」から計8名の登壇者に論考をお寄せいただきました (下記に目次を掲載)。本紀要では、文系・理系を問わず、学内外からの学術論文の投稿を広く受け付けています。論文要領や執筆要領などの詳細はセンターのサイトをご覧ください。(URL: <https://www.seikei.ac.jp/university/caps/>)



目次

【特集：繋がりのアジア】

〈公開シンポジウム「スポーツと国際貢献を考える—「競うこと」と「つながること」の先へ—」から〉	
パラリンピックという夢—「不可能性の時代」の身体論／東京2020から発信するスポーツの価値について	中江 桂子
戦後アジアの夏季オリンピック開催と「東京2020」の課題—スポーツ空間論の観点から	菊 幸一
スポーツによる国際貢献の向こう側：スポーツ援助の先に何が起ころのか？	小林 勉
〈公開シンポジウム「日本の中の朝鮮文化、再発見」から〉	
柳宗悦の想像力について—朝鮮と日本の発見をめぐる	中江 桂子
古代史のなかの朝鮮文化—東アジア世界と日本	井上 満郎
古代北九州と朝鮮半島南部との共同文化圏について	金 政起
〈公開シンポジウム「新興国ベトナム 変わる日本—拡大する若者の越境的移動」から〉	
ベトナムの労働力輸出—技能実習生の失踪問題への対応	石塚 二葉
ベトナムからの建設技能実習生の送り出しをめぐる実態—積極的勧誘期における中間組織の役割に着目して	惠羅 さとみ
帰国したベトナム人留学生の仕事と収入	平澤 文美

【論文】

現代モンゴル家族財産制度における夫婦財産分与	Baldandorj Urangoo
National Development and Indigenous Rights in Latin America: Analysis of the tensions produced with the Chilean State by the Mapuche demand for self-determination	Jeanne W. Simon & Claudio González-Parra
インドネシアにおける容姿の規定メカニズムの計量分析—美しさは生まれつきか、合理的な投資戦略か	小林 盾 西村 謙一

【投稿論文】

中国における公訴時効 (訴追時効) 制度の刑事法・行政法比較	高橋 孝治
--------------------------------	-------

【パイロット研究報告】

組織内を組織市民行動が広がるプロセスについて	上田 泰
水資源の高度利用に資する気液境界放電シミュレーション	村上 朝之
八王子市におけるサポートネットワークと暮らしの安心の基礎的分析—2017年「第2回暮らしの安全と安心に関する市民意識調査」より	内藤 準

CAPS 主催企画の報告

ドキュメンタリー連続上映会—グローバルに連鎖する労働とアジアシリーズ—
『ザ・トゥルー・コスト ファストファッション 真の代償』、『危路工団』
—橋大学大学院社会学研究科修士課程 石井 このみ

2018年12月15日、グローバルに連鎖する労働とアジアシリーズの連続上映会が開催され、『ザ・トゥルー・コスト ファストファッション 真の代償』と『危路工団』が上映された。

『ザ・トゥルー・コスト ファストファッション 真の代償』は、ファストファッションの製造の裏側を多角的に描いている。衣服の安さの追求のために東南アジアなどの安価な労働力が利用されているということは以前から認識していたが、この作品を通して、これほどまでの悲惨な状況の上にファッション業界が成り立っているのだということに驚かされた。バングラデシュの製造工場では多くの労働者が、危険な環境の下、低賃金で働いている。また、衣服の製造過程だけではなく、綿花やその種子という原材料の製造過程においてもコストの削減が極限まで推し進められている。その過程で用いられる化学薬品は、農家や周辺住民に脳腫瘍やがん、様々な障害をもたらし、自然環境をも破壊している。更に、次々と新たな商品が求められる現在の風潮の中では、多くの服がすぐに廃棄されているが、廃棄された服は、途上国に「寄付」され、その大量の服が地元の服飾産業を衰退させている。このように、先進国における大量消費文化は、労働者の権利や健康、伝統、自然環境などあらゆるものの破壊の上に成り立っている。この作品は、我々の社会が、消費スタイルや経済システムそのものを見直すべき時に来ていることを訴えている。

『危路工団』は、主に韓国の女性労働者にスポットを当て、彼女たちの悲惨な労働の状況とそこでの戦いを描いている。この作品では、1970年代から現在までの韓国の女性労働者の姿が描かれているが、かつての悲惨な労働や搾取の構造は、決



伊藤 和子 氏 (トークゲスト)

して過去のものでも遠い地で起こっていることでもないことが分かる。韓国の非正規雇用の女性たちが直面してきた悲惨な現実、現代の日本社会にとっても他人事ではない。便利さや安さの追求の中で、労働者がモノのように扱われ、多くの女性の人権が踏みにじられている現実があること、多くの女性たちの哀しみ、苦痛を、この作品はひしひしと伝えている。

上映会の後には、弁護士で国際人権NGOの事務局長である伊藤和子氏のゲストトークが行われた。伊藤氏は、2作品で描かれたような現実に対して我々が出来ることとして、現実を知り、そのことを周りに知らせること、エシカルブランドを応援すること、悲惨な労働環境を訴える人に対して募金などで明確に応援の姿勢を示すことを挙げていた。我々は、自らの消費の裏にどのような人々がいるのか知らなければならない。そしてその上で、よりよい選択を行い行動に移すべきではないか。身近な行動や選択を考え直すきっかけとなる上映会であった。

2018年度公開シンポジウム

人口減少時代と外国人労働者—日本の産業・労働政策と社会的公正の未来を考える

一橋大学大学院社会学研究科修士課程 赤瀬 歩
成蹊大学アジア太平洋研究センター 移民・ディアスポラ研究会 共催

2018年12月22日(土)、公開シンポジウム「人口減少時代と外国人労働者—日本の産業・労働政策と社会的公正の未来を考える」が開催された。本シンポジウムは、人口減少が深刻な漁業・宿泊業・建設業など、日本の国内産業を支える外国人労働者の就労を、産業労働的視点で再考する場となった。当日は各専門分野の研究者による実態報告を通して日本の現状と未来のあり方が議論された。

冒頭の津崎克彦氏(四天王寺大学人文社会学部講師)による基調講演では、日本の産業構造や途上国からの送り出し状況の変化を時代経



津崎 克彦氏 (基調講演)

緯ごとに辿りながら、人口問題への対応として日本の国際化が行われ、外国人労働者の受け入れ拡大と国籍の多様化が進展してきたことが明らかになった。その上で、2019年4月に改正入管法(特定技能在留資格の創設)施行を迎える今後の日本における、技能実習生や留学生の苦境・反グローバリズムに関する議論として、外国人労働者と移民の定義の明確化や移民政策導入の是非・政策領域の特定の必要性などが提起された。

登壇者として、まず坂本信博氏(西日本新聞社、「新移民時代」取材班代表)による報告では、九州で就労者が拡大している外国人労働者の就労状況の認知を広めるキャンペーン報道の取材活動で判明した、留学生ビザで在留するネパール人の労働集積型の現場や過酷な生活環境、ネパールから日本への送り出しビジネス化の動向に関する内容報告が行われた。坂本氏は、一時的労働力の導入であることを主張しつつ、移民政策であることを断

固として否定する政策方針に疑問を呈した。日本の産業を支える外国人労働者を日本社会の生活者としてみなす事で、社会的共生しやすい環境や制度の整備が不可欠であることを改めて強調した。

同じく、九州で若年男性の外国人労働力が拡大する漁船・漁業の現状に関する報告を行った佐々木貴文氏(鹿児島大学水産学部准教授)は、他の産



駒井 洋氏 (パネル司会)

業と比較した漁船・漁業の待遇や就労環境での身体的危険性、さらに近年の海技士不足・高齢化を補うための外国人労働者の技能化に向けた産業実態の詳細な動向を報告した。日本人の食生活にとっ

て不可欠である漁業生産も外国人労働者に依存していることの認識を高める報告内容となった。

続く山口恵子氏(東京学芸大学教育学部准教授)は、観光産業需要の拡大と産業構造変化に取り巻かれ増加する、宿泊業に従事する女性外国人労働者の拡大に着目し、半ケア労働である宿泊業の就労環境の特徴と変化、近年の外国人労働者参入プロセスの動向と入管法改正により特定技能が主要な労働力供給口に利用されていくことについて言及した。

最終登壇者である恵羅さとみ氏(CAPS主任研究員)は、建設業においては、急速な高齢化と主要年齢層の将来的な離職による深刻な技能者不足に直面しているとした。建設業界の硬直的な重層下請構造下での就労環境の改善が困難となっている実態や、トップダウンでの政策的枠組みとして、建設産業への受け入れ拡充策が決定した入管法改正についても、中長期的な労使関係構築の課題や展

望に関する議論の不足とその必要性を指摘した。

是川夕氏（国立社会保障・人口問題研究所国際関係部第2室長）による登壇者報告に対するコメント・評価では、国勢調査による統計デー



坂本 信博 氏



佐々木 貴文 氏

タに基づき、主な産業での中卒若年層の外国人労働者の割合の増加、職業別の就労人口の変化に伴う外国人労働者の割合の変化、各職業就業者における外国人学生割合の拡大から、日本の産業界での外国人受け入れが進んでいることが述べられた。また、単純労働者と並行して、高度人材も徐々に増加していることから、すでに高度な技能を引き継ぐ外国人労働者が日本の産業を担っていく方向性にあり、共生とは語学や日本の文化を通してだけでなく、スキル（技能）を軸として確立される可能性が見出せるとした。一方で人権を保障する国民国家の制度下においては、平等性を認める範囲の明確化など、国際的にも様々なジレンマが見られる中、日本ではどのような方向に向かうべきか十分な検討の余地があることが後半のパネルディスカッションでの論点となった。

登壇者によるパネルディスカッションでは、今後、特定技能の在留の新設による影響として、地方だけでなく、大都市部にもますます外国人労働者や女性の増加が見込まれること、また再生産労働の国際分業が広まり、ジェンダー不平等もまた

ます顕在化することが懸念された。そもそも先進諸国の単純労働はその周辺に位置する貧しい国の外国人が担うべきなのか。単純労働はスキル（技能）化だけでは評価できず、日本では技能以外の精神的

要素が求められる職種も多く、見習い制度・親方制度からの共生への道も開かれづらいという課題も残る。今後このようなスキル（技能）を日本の労働市場においてどのように位置づけるべきか。日本の単純労働領域における技能を再定義していくことで、日本の産業機能の一部を外国人労働力に依存することと、国内問題として人口問題とどのように付き合っていくべきかを十分に議論し、日本の社会における認識の共有を図らなければならない。4月の入管法改正に伴う特定技能在留資格創設に備え、日本社会における外国人労働者の位置付けが再度問い直される必要がある。

最後にパネルディスカッションの司会を務めた駒井洋氏（筑波大学名誉教授 移民・ディアスポラ研究会代表）は、こうした外国人労働者による単純労働力の増加は、日本においては決して新しい事象ではないことを改めて強調し、外国人労働者を一時労働力としてではなく、その家族共々、日本社会への統合の道が開かれるような移民受け入れ政策へと方針を改めるべき新移民時代に突入しているとして、本シンポジウムを締めくくった。



山口 恵子 氏



惠羅 さとみ 氏



是川 夕 氏

CAPS 叢書 新刊3冊の紹介

細谷広美、佐藤義明編著『グローバル化する〈正義〉の人類学—国際社会における法形成とローカリティ』
(2019年2月 昭和堂 本体 5,400円＋税、ISBN：9784812218044)

本書のもととなるプロジェクトは、サバティカル中にハーバード大学ロースクールで研究をした際に、本学法学部の佐藤義明教授と出会ったことによって生まれた。

なぜ人類学者がロースクールに、と思われるかもしれないが、グローバル化が進展することで従来の欧米的価値の普遍性が問われ、開発、法、平和構築等、様々な現場で文化と関わる相違が顕在化していることによる。グローバルな課題への国境を越えた取り組みにおいて、正義(justice)はその基盤を構成する。しかし、多様な人々が多様な背景と価値観をもつ世界において、正義もまた権力関係や交渉の場におかれる。本書は、国際社会において正義が共通の規範として標準化、汎用化するプロセスと、ローカルな現場の関係性のダイナミズムを、法に焦点を当て明らかにすることを目指した。このため、人類学を中心に国際法、政治学、歴史学、社会学の専門家が共同研究を通じて学際的議論を重ねた。国連の人種差別撤廃委員に日本人として初めて選出された洪恵子氏や海外の執筆者を含め、扱う地域も世界各地に及ぶ。

ちなみに表紙の写真は、ベネチア・ビエンナーレ日本館展示経験をもつ現代美術家塩田千春氏の作品「どこへ向かって」である。現在GINZA SIXに氏の作品が展示されており、今年の6月から森美術館(六本木ヒルズ)で氏の大規模な個展が開催される予定である。



庄司宏子編著『国民国家と文学—植民地主義からグローバリゼーションまで』
(2019年2月 作品社 本体 3,200円＋税、ISBN：9784861827273)

〈国民国家〉とは、概ね18世紀後半にヨーロッパから生まれたとされる、固有の領土をもち〈単一の〉民族の歴史と文化、言語が共有される近代国家のモデルである。実際には複数の民族や人種、それに言語が混在しない国民国家はほとんどないにもかかわらず、〈国民国家〉は均質的なナショナル・アイデンティティの土台となり、私たちの日常にさまざまな規制と保護、抑制と帰属感を与えている。国民国家は内外に一国の政治経済を編制するのみならず、国文学や国史という形で〈知〉を形象してきた。文学は国民国家とどのように関わってきたのか。本書は、ヨーロッパの植民地支配を受け、のちに西洋型の国民国家をモデルとして誕生するアルジェリアや南アフリカ共和国、カリブ海諸国など新生国家の文学に読み解く。そして国民国家が形づくってきた世界を文学がどのように相対化しうるかを論じる。16世紀以降の西洋による植民地支配から、国家の制御を超えた資産と情報データをもつ巨大IT企業が出現するグローバリゼーションの現代まで、移りゆく国民国家のもとで余儀なくされる文学研究の枠組など知の変革を見据え、英語圏・仏語圏の文学、それに日本の戦後文学について研究者が地域横断的に考察する。



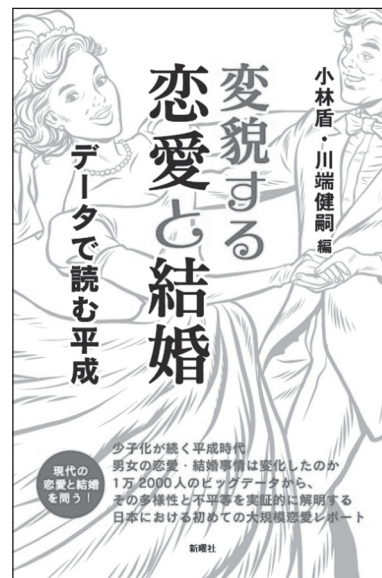
小林盾・川端健嗣編『変貌する恋愛と結婚：データで読む平成』
(2019年4月 新曜社 2,500円＋税、ISBN：9784788516304)

若者は、草食化して恋愛しなくなった。結婚した人ほど、幸せである。——恋愛や結婚には、いつでも謎がつきまといます。では、これらは事実なのでしょうか、それとも根拠のない「神話」や「伝説」なのでしょうか。

そこでこの本では、昭和から平成にかけて、恋愛や結婚をめぐる状況がどのように変貌したのかを、さまざまな角度から考えます。そのために、全国1万2000人を対象としたビッグデータを集めて、克明に分析しました。いわば、日本初の大規模恋愛レポートとして「日本版キンゼイレポート」といえるかもしれません。

主な読者には、高校生、大学生、社会人、そして社会学者を想定しています。

恋愛や結婚は、およそすべての人に関わることで、できるだけ前提知識なしに理解できるよう工夫しました。なお、この本は『ライフスタイルとライフコース：データで読む現代社会』（山田昌弘・小林盾編、成蹊大学アジア太平洋研究センター叢書、2015年、新曜社）の続編にあたります。とはいえ、それぞれの本は独立して読むことができます。読者の皆さんが豊かな未来のためになにかヒントを見つけだしてくれたら、編者として嬉しいかぎりです。



〈CAPSからのお知らせ〉



2019年度【CAPS CINEMA】 グローバリゼーションのなかの地域共生
2019年5月25日(土)
『幸せの経済学』上映 & 講演会

CAPSでは、毎年度ドキュメンタリー連続上映会を開催してきました。2019年度は【CAPS CINEMA】と表して、アジア太平洋地域を中心とした社会の諸問題に対して幅広くテーマを定め、みなさんと一緒に考えていくための上映会を開催します。

2019年5月25日(土)には、“グローバリゼーションのなかの地域共生”をテーマとして、ヘレナ・ノーバーグ・ホッジ監督の『幸せの経済学』(2010年)を上映いたします。ヒマラヤの辺境ラダックの人々の姿から、環境活動家たちが語るグローバリゼーションの負の側面、そして地域の力を取り戻すローカリゼーションの促進と「本当の豊かさとは何か」について描いた作品です。上映後に浅羽隆史法学部教授(成蹊大学地域共生社会研究所所員)による講演を予定しています。グローバル化された社会には、メリットの反面、弊害もあります。ローカリゼーションがそうした弊害をすべて解消する訳ではありませんが、私たちの生活を豊かにするヒントを含んでいます。共生社会のあり方を考えてみませんか。

今後は9～10月頃に“戦後の沖縄”、10～11月頃に“労働とアジア”をテーマとして、上映会の開催を予定しています。詳細は確定次第、CAPSサイトの「イベントのお知らせ(CAPSの催し)」に掲載します。
(<https://www.seikei.ac.jp/university/caps/>)



シリーズ 本を読む

*Michio Itō's Reminiscences of Ezra Pound, W.B. Yeats and Other Matters:
A Translation and Critical Edition of a Seminal Document in Modernist Aesthetics,*
Michio Itō, edited with a Critical Introduction and Notes by David Ewick and Dorsey Kleitz
(Edwin Mellen Press, 2018)

文学部教授 Barnaby Ralph

It can be hard, in the sea of published works that breaks against the shore of readers each year, to find something of value, let alone importance. Information washes over us constantly and often leaves nothing behind but dampness and a faint briny smell. However, this slender volume is worth more than simply casual attention.

The reviewed work is the translation of a lecture by Michio Itō, given in 1955 at Tokyo Woman's Christian University, and it opens with a rather poignant introduction by his granddaughter, who urges the reader to put the search for absolutist veracity to one side, and to focus upon "ideology" from "a master storyteller" rather than simple, brutal "logistics." This is an exhortation that charms from the very outset.

Unlike many similar volumes, the introductory material here is of equal value to the main body itself. As well as the preface by Itō's granddaughter, there is a superb foreword by John Gery, Director of the Ezra Pound Center for Literature, connecting Pound, Yeats and Itō and emphasizing the key point – for, at least, a lecture by a Modernist dancer – that beauty can be something dynamic. This is followed by an introduction that, whilst logical and chronological, has something of a stream-of-consciousness feel itself, and in which the authoritative presence of the first of the editors is most clearly felt. Via this Ewickian voice, we are offered a biographical sketch that draws together history with interpreted significance, offering a fascinating overview of both Itō and

the tensions of his day.

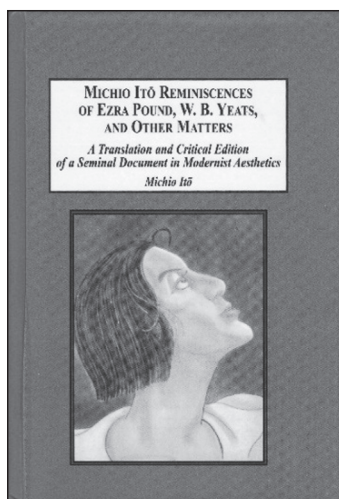
The lecture itself is endearing, frank, chatty and yet profound. It opens with an indication of the two worlds between which Itō lived through his early attempts to study music, which led to dance and a wonderful relationship with Debussy, amongst others. From here, there is an encounter with an Arabic sage in Egypt, which sets the stage for a career that was to embrace the leading artistic figures of the early twentieth

century, from the dancers Isadora Duncan and Émile Jaques-Dalcroze to the critic Shaw and the poets Pound and Yeats, on whom Itō's influence is perhaps of the most interest to scholars of literary Modernism.

Studies which mention Itō in the Western context tend to explore his influence on others, seeing him as a creative force of a certain type, yet we find precisely the opposite happening here. Within his lecture, he sees himself as a palimpsest, onto which the

symbols of different cultures might be inscribed. In fact, he recounts his own reacting with horror to the realization that others saw him as a kind of Asian authoritative voice, to which his instinctive response was silence.

With this well-annotated and finely-framed translation, many international scholars of Modernism are finally able to understand Itō as a figure looking out, and to witness his grappling with the concepts of balance and cultural transference. There is much to enjoy and much to ponder in this wonderful lecture, and it is surely an essential addition to any serious library of Modernist studies.



〈2019年度 研究プロジェクト一覧〉

		責任者名	研究題目と目的
共同研究プロジェクト	三年目	渡邊 大輔 文学部准教授 (継続)	グローバルエイジングとライフコース変容(期間:2017.4.1～2020.3.31) 題目:グローバルエイジングとライフコース変容:福祉国家形成と展開の社会学的分析 目的:高齢化が進展する中で、福祉国家形成が進む先進諸国と途上にある途上国間で、どのようなライフコースの変容がみられるか分析する。
	二年目	井上 淳子 経済学部教授 (継続)	消費者行動における無意識と潜在意識の探究(期間:2018.4.1～2021.3.31) 題目:消費者行動における無意識と潜在意識の探究 目的:消費者の態度および選択行動の背後にある無意識と潜在意識について、IAT(潜在連合テスト)を応用することで解明し、風評被害製品などの回復方法を検討する。
	一年目	久富 寿 理工学部教授	アジアにおける雪割草の分子系統樹作成および新種固定(期間:2019.4.1～2022.3.31) 題目:アジアにおける雪割草の分子系統樹作成および新種固定 目的:アジアに生息する雪割草のDNA配列の違いから、雪割草の進化系統樹を作成する。
パイロット研究		小河 重三郎 理工学部助教	天然油脂脂肪酸を利用したエステル交換反応によるトレハロース脂肪酸エステルの調整とその応用(期間:2019.4.1～2020.3.31) 題目:天然油脂脂肪酸を利用したエステル交換反応によるトレハロース脂肪酸エステルの調整とその応用 目的:天然油脂脂肪酸とトレハロースを結合することでタンパク質安定化能において高い機能を与える糖脂質材料を開発する。
		立石 洋子 法学部助教	旧ソ連・ロシアにおける第二次世界大戦の記憶と国民意識(期間:2019.4.1～2020.3.31) 題目:旧ソ連・ロシアにおける第二次世界大戦の記憶と国民意識 目的:旧ソ連・ロシアにおける第二次世界大戦の記憶の継承の分析を通じて、ロシアの国民意識の特徴を明らかにする。

〈2018年度 新着文献 一覧〉

※CAPS資料室蔵書から新着文献の一部を紹介します。

※学生・教職員とも資料の閲覧や貸出しが可能です(学生証・教職員証が必要)。成蹊大学図書館OPACから文献検索が出来ます。

	書籍名	編著者	刊行年/出版元
外交／歴史	現代日本の政治と外交2 日米安全保障同盟—地域的 多国間主義	猪口孝監修・編	2013/原書房
	朝鮮半島の秩序再編	小此木政夫・西野純也編	2013/慶應義塾大学出版会
	「沖縄県民」の起源—戦後沖縄型ナショナル・アイデンティティの生成過程1945-1956	坂下雅一著	2017/有信堂
	アメリカ太平洋軍の研究—インド・太平洋の安全保障	土屋大洋編	2018/千倉書房
	沖縄からの本土爆撃—米軍出撃基地の誕生	林博史著	2018/吉川弘文館
	戦後アジア・ヨーロッパ関係史—冷戦・脱植民地化・地域主義	細谷雄一編	2015/慶應義塾大学出版会
帝国主義／動員	〈写真記録〉筑豊・軍艦島—朝鮮人強制連行、その後	林えいだい	2010/弦書房
	朝鮮人戦時労働動員	山田昭次ほか著	2005/岩波書店
	日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学	蘭信三著	2008/不二出版
	帝国以後の人の移動—ポストコロニアリズムとグローバル化の交錯点	蘭信三著	2013/勉誠出版
	移民たちの「満州」	二松啓紀著	2015/平凡社
	満州移民—飯田下伊那からのメッセージ	飯田市歴史研究所編	2009/現代史料出版
世界史	世界史とつながる日本史 紀伊半島からの視座	村井章介 監修	2018/ミネルヴァ書房
	大分岐—中国、ヨーロッパ、そして近代世界経済の形成—	K・ポメラントツ著	2015/名古屋大学出版会
	「大分岐」を超えて:アジアからみた19世紀論再考	秋田茂編	2018/ミネルヴァ書房

	書籍名	編著者	刊行年 / 出版元
戦争社会学	戦争社会学の構想—制度・体験・メディア	福岡良明編	2013/ 勉誠出版
	ミュージアムと負の記憶—戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか	竹沢尚一郎著	2015/ 東信堂
資本主義経済	グローバル資本主義と〈放逐〉の論理——不可視化されゆく人々と空間	サスキア・サッセン著	2017/ 明石書店
	誰が世界を支配しているのか？	ノーム・チョムスキー著	2018/ 双葉社
	続・善と悪の経済学 資本主義の精神分析	トーマス・セドラチェックほか著	2018/ 東洋経済新報社
アジア諸国の政治経済	分業するアジア—深化するASEAN・中国の分業構造	池部亮・藤江秀樹著	2016/ 日本貿易振興機構
	現代中国経済論[第2版]	梶谷懐・藤井大輔編	2018/ ミネルヴァ書房
	東南アジア現代政治入門[改訂版]	清水一史編	2018/ ミネルヴァ書房
	21世紀東南アジアの強権政治——「ストロングマン」時代の到来	外山文子編著	2018/ 明石書店
	アジア都市の成長戦略——「国の経済発展」の概念を変えるダイナミズム	後藤康浩著	2018/ 慶應義塾大学出版会
	人身売買と貧困の女性化—カンボジアにおける構造的暴力	島崎裕子著	2018/ 明石書店
	プラナカン 東南アジアを動かす謎の民	太田泰彦著	2018/ 日本経済新聞出版社
復興／原発／過疎	原発災害と地元コミュニティ—福島県川内村奮闘記（コミュニティ政策叢書）	鳥越皓之編	2018/ 東信堂
	脱原発をめざす市民活動 3.11 社会運動の社会学	町村敬志・佐藤圭一編	2016/ 新曜社
	復興の空間経済学 人口減少時代の地域再生	藤田昌久ほか著	2018/ 日本経済新聞出版社
	限界集落の真実：過疎の村は消えるか？	山下祐介著	2012/ 筑摩書房
	中国山地 過疎 50 年	中国新聞取材班編	2017/ 未来社
移動／共生	日本人と海外移住	日本移民学会編	2018/ 明石書店
	南米「棄民」政策の実像	遠藤十亜希著	2016/ 岩波書店
	排外主義の国際比較：先進諸国における外国人移民の実態	樽本英樹編	2018/ ミネルヴァ書房
	「混血」と「日本人」—ハーフ・ダブル・ミックスの社会史	下地ローレンス吉孝著	2018/ 青土社
	「外国人の人権」の社会学——外国人へのまなざしと偽装査証、少年非行、LGBT、そしてヘイト	丹野清人著	2018/ 吉田書店
	希望 オーストラリアにきた難民と支援者の語り——多文化国家の難民受け入れと定住の歴史	アン＝マリー・ジョーデンス著	2018/ 明石書店

CAPS 活動報告 (2018.12.16 ～ 2019.3.15)

1. 公開講演会、研究会等

～公開シンポジウム～

開催日	12月22日(土)
タイトル	人口減少時代と外国人労働者—日本の産業・労働政策と社会的公正の未来を考える
講演者	津崎 克彦（四天王寺大学人文社会学部講師）、坂本 信博（西日本新聞社「新 移民時代」取材班代表）、佐々木 貴文（鹿児島大学水産学部准教授）、山口 恵子（東京学芸大学教育学部准教授）、恵羅 さとみ（CAPS主任研究員）
コメンテーター	是川 夕（国立社会保障・人口問題研究所国際関係部第2室長）
司会・総評	駒井 洋（筑波大学名誉教授）
参加人数	149名

～プロジェクト研究会～

開催日	2019年1月30日(水)
プロジェクト名	アジア太平洋地域における情動メディアとしての西洋音楽の影響
講演者	日比野 啓（文学部教授）、バーナビー・ラルフ（文学部准教授）、ヘンリー・ジョンソン（オタゴ大学教授）、大友 彩子（独立研究者）
参加者	4名

～【CAPS CINEMA】ドキュメンタリー連続上映会～
～グローバルに連鎖する労働とアジアシリーズ～

開催日	3月8日(金)
タイトル	『ザ・トゥルー・コスト ファストファッション 真の代償』＜アンコール上映＞
参加人数	41名

開催日	3月15日(金)
タイトル	『ザ・トゥルー・コスト ファストファッション 真の代償』＜Movie on the Planet 2019 (情報図書館とのコラボレーション企画) 於 図書館4階プラネット 終日リピート上映＞
参加人数	8名

2. 研究出張

～海外出張～

期間	1月26日(土)～2月1日(金)
プロジェクト名	アジア太平洋地域における情動メディアとしての西洋音楽の影響
出張者	日比野 啓(文学部教授)、バーナビー・ラルフ(文学部准教授)、大友 彩子(独立研究者)
行先	ニュージーランド
目的	研究会実施・成果論文集打合せ・資料収集

～国内出張～

期間	1月10日(木)
プロジェクト名	グローバルエイジングとライフコース変容
出張者	渡邊 大輔(文学部准教授)
行先	大阪府
目的	調査・視察

期間	1月17日(木)～1月19日(土) 2月15日(金)～2月17日(日)
プロジェクト名	「美の社会学」の追求
出張者	挾本 佳代(経済学部教授)
行先	京都府
目的	資料収集

期間	1月31日(木)～2月1日(金) 2月21日(木)～2月22日(金) 3月7日(木)～3月8日(金)
プロジェクト名	「美の社会学」の追求
出張者	挾本 佳代(経済学部教授)
行先	大阪府
目的	資料収集

期間	3月7日(木)～3月8日(金)
プロジェクト名	グローバルエイジングとライフコース変容
出張者	内藤 準(文学部講師)、川端 健嗣(嘱託職員)
行先	京都府
目的	数理社会学会大会参加

期間	3月13日(水)
プロジェクト名	グローバルエイジングとライフコース変容
出張者	渡邊 大輔(文学部准教授)
行先	山口県
目的	調査・視察

3. 会議の記録

開催日	1月8日(火)
会議名	所員会議

開催日	1月9日(水)
会議名	運営委員会

開催日	3月8日(金)～14日(木)
会議名	臨時(メール)所員会議・運営委員会

—お詫びと訂正—

2019年1月15日発行のCAPS Newsletter 141号の掲載内容につきまして、編集段階の不備により誤りがございました。

p4「ラテンアメリカ音楽レクチャー・コンサート」の右段落2行目
誤:「同じく東京大学大学院生の牧野翔さん」
正:「東京藝術大学大学院生の牧野翔さん」

執筆者の細谷広美教授ならびに関係者、読者の皆様に謹んでお詫び申し上げ、ここに訂正いたします。

CAPS Newsletter No.142

2019年4月15日発行

編集発行: 成蹊大学アジア太平洋研究センター
〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549 (ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: <https://www.seikei.ac.jp/university/caps/>